

---

# 化け物寺

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

化け物寺

### 【Nコード】

N7678D

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

応仁の乱の後の近江の国。そこのある村に入った旅の僧侶行間はそこで誰もいない寺を見つけた。その住職になろうとするがその寺には。古典にあったお話を書いてみました。

## 第一章

### 化け物寺

応仁の乱で今日の都が随分荒れて暫く経た頃のことである。戦乱は各地に飛び火しあちこちで戦の笛の音が聞こえるようになっていた。その荒れている諸国を行脚する僧侶達もいささかその身に危険を伴うようにはなっていた。だがそれで行脚する僧はおりの行間という僧もそのうちの一人であった。

彼が近江に入り北に少し行くとある村に見掛けがよく立派な寺があるのを見た。東には開けた野があり南には大きな池がある。西には藪があり北の方には山が連なっている。そうした中にその寺があった。

「ふうむ」

行間はその寺の周りを見回したうえでまた寺自体をみやった。周囲とも合わさったその姿はやはりいいものだ。そこまで見たうえで村の者に話を聞くことにした。まずは村人の一人にその寺のことを聞くのであった。

「ああ、あのお寺ですか」

「左様です」

丁寧な声でその村人に応える。見ればその村人は身なりが中々いい。近江の方でも戦はあるがそれでも最近は穏やかなものになっている。浅井家の主浅い亮政の統治が結構上手くいつているせいでもある。彼は中々の傑物であったのだ。そのせいでこの村も穏やかに暮らせているのであろう、行間は村人を見ながら心の中でそう思いつつ村人と話をするのだった。

「どの様な場所でしょうか」

「確かに立派なお寺です」

村人は最初こう答えるのであった。

「立派は立派なのですが」

「何かあるのですか？」

「最初は住職様がおられました」

村人は次にこう述べてきた。

「ですが今は」

「おられないのですね」

「はい、実は何度かお坊様が入られてもすぐに出て行かれるのです」

「ほう、それはまたどうして」

ここまで話を聞いてそれに興味を向けないという流れにはならなかった。この時の行間もそれは同じだった。彼は実際に村人にその訳を聞くのであった。

「化け物が出るのです」

村人は顔を顰めさせて行間に答えた。

「そのせいでどなたも一日入られて次の日には」

「出て行かれるのですか」

「そうです。それであるの寺は長い間化け物のものになっているのでございます」

村人はここまで話して大きく溜息を出すのであった。

「勿体ないことです。折角のお寺が」

「ふむ。では誰もおられるのですな、今そのお寺には」

「結果としてそうなります」

村人はそのことを繰り返す形で述べた。

「少なくとも人はおりませぬ」

「わかり申した。それでは」

彼は再度それを認めたらうえでこう申し出たのであった。

「拙僧がその寺に入って宜しいでしょうか」

「えっ、お坊様がですか」

「そうです」

彼はにこやかに笑って答えるのであった。

「誰もおられぬのなら。宜しいですね」

「ですがそれは」 106

村人は彼を氣遣う顔を見せて止めてきた。

「あまりにも。危険では」

「何、化け物を恐れていては諸国を行脚することはできません」

一笑してこう言ってみせてきた。

「そうではありませんか」

「お坊様がそう仰るのなら」

「宜しいですね」

「いえ、少しお待ち下さい」

彼はこう告げて一旦行間を止めるのであった。

「その前に話し合ってみます」

「村ですか」

「そうです。確かにそれは有り難き申し出です」

正直彼等にとつてもその寺が空いたままであるというのは都合が悪いらしい。その証拠に今の村人の顔には不安だけでなく期待も浮かんでいた。その二色がそれぞれ混ざり合って一つの色になったというような、そうした複雑な顔を行間に見せているのである。

「ですが。それでも」

「化け物のことですね」

「残念ですがその通りです」

理由は他になかった。そもそも化け物がいなければ既に誰か入っている。それは行間ももうわかっていることではあったが。

「ですから。暫しお待ちを」

「わかりました。それでは」

行間は村人の家に暫し泊めてもらい村人達はその間彼に寺に入ってもらいか話をしたのであった。彼が村に入ったその日の夜遅くのことだった。質素な村人の家の中で静かに寝入っていた彼を起こす声が聞こえてきたのである。

「もし」

「はい」

行間はそれに応えて身を起こした。すると彼の枕元に数人の村人

がいたのであった。彼等は起き上がった行間の顔を暗がりの中で見ていた。

「話が終わりました」

「左様で。それで」

「是非入って下さい」

結論はまずは行間にとってはいいものであった。

「あのような寺ですが宜しければ」

「有り難き御言葉」

村人達に対して礼を述べる。しかし話はそれで終わりではなかった。

「ただ。御願いがあるのですが」

「化け物のことですか」

「左様です」

彼等は行間に対して答えた。

「その化け物さえどうにかして頂ければ」

「喜んで」

「何、お任せ下さい」

行間は彼等の言葉を受けてもにこやかな笑みを浮かべていた。

「すぐに終わります、その様なことでしたら」

「化け物でもですか」

「鬼や天狗であっても」

当時最も恐れられていたものだ。

「恐れることはありません。拙僧にとっては」

「そこまで仰るのですか」

「はい。あの寺に法灯を再び灯してみせましょう」

こうまで言うのだった。

「ですから。お任せ下さい」

「そこまで仰るのですしたら」

「明日から。是非」

「ええ。それでは」

こうしておおよその話は決まった。行間はその寺に入った。見れば中も奇麗に掃除されておりまるで既に誰かが住んでいるようである。廊下も庭も雪隠も何処も奇麗なものであり今すぐここで暮らせる程であった。とりわけ庭にある椿の木は見事なものであり行間も気に入った。

境内に入ると仏像だけが放っておかれている。行間はそれを見て成程とおもうのであった。

「ふむ、やはり」

顎に右手を当てて述べる。境内も奇麗に掃除されているが普賢菩薩の仏像だけが掃除されていない。埃と蜘蛛の巣で汚いものであった。

とりあえずその仏像だけ掃除して後は自分に部屋に相應しい一室に入った。そこで持つて来た乾米による簡素な夕食を採り部屋の中にあつた奇麗な布団を敷いて寝た。その日はそれで終わりかと思われた。

ところがだ。真夜中になって急に障子の向こうが眩しくなった。ふとその光で目が起こされると自然に身体も起こされた。起き上がって外を見るとそこには何もない。ところが部屋に戻るとまた眩しくなるのだった。実に奇怪なことであつたが彼はここで合点がいつたのであつた。

「ふむ。これだな」

化け物だと思つた。すると外からこんな声がした。

「椿木を切るな」

こう言っている。やけに奇麗な声であつた。女の声に近い。

「誰であろうか」

「東野の野干だ」

行間の問いにこう答える。だが彼はその声の主が誰なのかわかつたのだった。

## 第二章

「そうか。主の正体がわかったぞ」

「何と」

「主は椿だな」

彼はそう声に対して問うのであった。

「違うか。椿ではないのか」

「何故そう思うか」

「では何故最初に椿木を切るなど言ったのか」

彼が問うたのはそこであった。

「それは主が椿である何よりの証拠」

「くっ」

「ほれ、見るがよい」

声が詰まったところをさらに指摘してみせた。

「今言葉を詰まらせた。それが何よりの証拠だ」

「我が椿であるということがか」

「左様。正体がわかればどうということはない」

彼は怖気なぞ全くない声で椿に告げるのであった。

「わかれば大人しくするのだよいな」

「見破られたからには仕方がない」

椿の声は観念した声を出してきた。

「ならば。今後は大人しくしておこう」

「それがいい。主の正体がわかった以上今度は村人が黙ってはおらぬぞ」

化け物は正体がわからぬからこそ化け物なのだ。ところが正体がわかってしまえば。それで終わりだ。それは椿の方でもわかっていたのだ。

「よいな。それでは」

「うむ」

行間の言葉に承えて声は消えた。ついでにもう光も出ることはなかった。行間はそれを確かめてからまずは安堵したのであった。

しかしすぐに。別のことも考えだした。

「これで終わりであればよいがな」

そうは思ったが同時にこれで終わりだとも思わなかった。すると今度は門のところ騒がしくなった。

「頼もつ」

「頼もつぞ」

四人程の屈強な男の声がする。行間はそれを聞いてやはり、と思つたがまずはその感情は言葉には出さないことにした。こつ門のところに戻すだけであつた。

「入られよ」

「部屋はどこらか」

「茶室がある」

こつ述べるのであつた。

「そこで御会いしよう。それでよいか」

「うむ、わかつた」

「それではな」

男の声達は行間のその言葉を受けた。そうして声を消すと今度は気配が寺の中に入るのを感じた。そのまま上がり込んで本当に茶室に向かつているのがわかる。どうやらこの寺の中は完全にわかつていようであつた。行間はその足音を聞きながらおそらくこれだ、と確信した。しかしその心もまた隠して自身も茶室に入る。当時茶室はできたばかりの時代であつたがこの寺の茶室は見事なものであつたのだ。

その茶室に入るともう既に四人の男達が待つていた。見れば鎧に身を包み腰には二本の刀を差している屈強な武者達であつた。

ところがその顔が違つていた。一人は狐、一人は狸、一人は鶏、そして最後の一人は鯉の顔をしている。一目見ただけで彼等が化け物であるのがわかる。彼等は狭いが見事な茶室の中で既に油の灯り

を点けて行間を待っていたのであった。並んで正座をしている。

「遅いぞ」

狐の頭の男が言ってきた。

「我等はもう用意ができている」

「主としてな」

「主であるのか」

行間は狸の頭の男の言葉に応えた。応えながら彼等の向かい側に座るのであった。形として確かに行間が客の形になっていた。

「左様。我等は既に長きに渡ってこの寺に住んでいる」

「だから主なのだ」

鶏の頭の男も告げた。

「客人」

鯉の頭の男が自分達の向かい側に座る行間に声をかけてきた。

「今宵は許してつかわす」

「今宵は？」

「左様」

今度は狸が言う。

「この寺に留まること。しかし」

「明日になれば去るがいい」

「ここは我等のもの」

鶏と狐が彼に告げる。 8

「だからだ」

「わかったならば従うのだ」

「ふむ。これはおかしなこと」

しかし行間は彼等にそれを言われても全く臆することはない。平気な顔をしたままである。

「何故人が化け物、いや獣に従わねばならぬのか」

「むっ!？」

「我等が獣だと」

「その通り。その証拠に」

まず行間は鯉に対して言うのだった。

「貴殿の肩に着いているもの」  
「肩に」

鯉はそれに合わせて自分の肩を見る。肩には鎧の肩当てがある。そこに着いているものは。

「水草じゃな。しかもまだ濡れている」

「それがどうしたのだ」

「貴殿は。この寺の南にある池の鯉だな」

「馬鹿な、そのようなことが」

「いや、わかるのじゃ」

行間はその声を険しくさせて述べた。しかしその顔は穏やかなままだ。

### 第三章

「濡れたままである。しかしこの寺の周りには水の場所は他にない。それではな」

「くっ、ぬかった」

「次に」

次に見たのは狸であった。

「その方は北の山にいるな」

「ははは、馬鹿なことを」

狸はそれを言われてもからからと笑う。平気な顔であった。表面上は。

「どうしてそうなるのかのう」

「口元じゃ」

行間は狸の口元を指し示した。

「口元に葡萄を食した後がある。紫になっているぞ」

「むむっ」

ふと口元を拭う。しかしそれは手遅れであった。

「山葡萄。それが何よりの証拠じゃな」

「まさか。すぐにそれを見ろとは」

「そして」

今度に見たのは狐だった。

「御主はさしづめ東の野原の狐じゃな」

「野原だと」

「腰のところじゃ」

狐は彼の言葉を聞いて腰当を見た。そこにあったのは。

「草が」

「その草が何よりの証じゃ」

彼の腰を指差しての言葉であった。

「狐であるな、そのの」

「うつ、観念するしかないか」  
「最後は」

最後に目をやったのは鶏であった。

「その方だがそこにあるのははっきりしておる」

「わしは何者だというのだ？」

「一つしかない。西の藪の鶏だ」

最後になっっているのか不敵な笑みさえ浮かべる行間であった。

「腹のところは蚊がついておるわ」

「そこも見ておったか」

「何分灯りがあつて助かった」

化け物、いや獣達がせめてもの情にともてなしの為に点けた灯りが仇となつたのであつた。彼等にとつてみれば因果なことであつた。

「さもなければこう簡単には見られんかつたわ」

「それで全て見抜いたか」

「我等のことを」

「事前に寺の周りも見ておいたしな」

「そこも見たうえでの言葉であつたのだ。」

「さて、どうする？」

「どうするだと」

「御主等の正体はわかつた」

獣達を見回して言う。

「正体を見破られれば化け物は危ういが」

「ふむ。確かに」

「それはその通りだ」

彼等もそれはわかつている。しかしばれても表面上だけかも知れないがその態度は堂々としていた。ふてぶてしくさえある。

「殺すつもりか？拙僧を」

「殺すだと」

「そうじゃ。寺に残り、そして正体をばらされぬ為に。違うか」

「馬鹿なことを」

「そんなことはせぬぞ」

だが獣達はその言葉には首を横に振る。あくまでそれはしないと  
いった態度であつた。

「我等は殺めることは好まぬ」

「例え畜生であつてもな」

「畜生であつてもか」

「それにだ」

彼等はさらに言い加えるのだった。

「我等の正体を見破つた程の賢人」

「害することは好まぬ」

「では。大人しく立ち去るといつのか」

「致し方あるまい」

獣達はその態度は堂々としたままであつたが言葉は神妙なもので  
あつた。

「我等の正体を見抜かれた。それならば」

「大人しくこの寺を明け渡そう」

「左様か。それならばよいのだ」

行間はまずはその言葉を受けた。だがもう一つ問題があつた。

「しかし。これからどうするのだ」

「これから？」

「そう、これからだ」

また獣達に対して述べた。

「これからどうするのか。寺には入られぬぞ」

「何、構わぬ」

「既に家はある」

こつ行間に答えるまでであつた。

「元の場所がな」

「そこに戻るだけか」

「ただ。約束しておく」

彼等はまた行間に対して言ってきた。

「我等はもう二度とこの寺には入らん」

「二度とか」

「左様、我等とて誇りがある」

「その誇りにおいて誓おう」

「こうまで言うのだった。」

「二度とこの寺には足を踏み入れぬとな」

「今全員で誓おう。それでよいか」

「うむ、その誓い受けた」

行間もまたその言葉を受けたのであった。受けた証に強く頷いてもみせた。

「では。その様にな」

「うむ。それでは御坊よ」

「この寺。存分に栄えさせるがいい」

獣達はそこまで言って姿を消した。こうしてこの寺での怪異も化け物も全て消え去ってしまったのであった。

それから獣達は姿を現わすことはなく寺には平穩が戻った。行間はこの寺の住職となり以後寺を栄えさせることとなった。その話のはじまりにはこうしたことがあった。全てのはじまりには何かしらの出来事があるものであるがこの寺についても行間についても同じであるということだった。近江の古い話であり中々興味深い話であるのでここに記しておく。なお今もこの寺はある。しかしどの寺であるのかは覚えている者は少ないという。

化け物寺 完

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7678d/>

---

化け物寺

2009年6月6日13時17分発行